いだてん 韋駄天の記

劇作家 岡部耕大

104

高校の律儀な友人

わたしの伊万里高校時代の友人に山口征矢がいる。詳しくは知らないが伊万里市の郊外が生まれ故郷らしい。大学を卒業してからは、細菌だか微生物の研究をしていて、観測船で南極か北極へも研究に行っているらしい。山口征矢は、よく新宿紀伊国屋ホールにわたしの演劇を見に来てくれる。いつも奥方と2人連れである。仲がいい。舞台の初日には終演後に初日乾杯をロビーでする。乾杯には付き合ってくれるが、すぐに帰ってしまう。

伊万里にはトンテントンというけんか祭りがある。荒御興と団車が市内の橋の上で激しくぶつかり合い、川落としをする勇壮な日本三大けんか祭りのひとつである。仕掛け太鼓の3連打が「トンテントン」の名の由来らしい。トンテントンの日には伊万里市内の高校は半ドンになった。半ドンとは半分が休日になる日の意味である。オランダ語のなまりで休日はドンタク。その半分で半ドン。

伊万里市内の同級生は「これからトンテントンば担がんばいかん」と張り切っている。長崎県松浦市からの越境入学者であるわたしは担ぐ資格はない。トンテントンそのものに参加する資格がないのである。伊万里の喧騒を後にして、昼すぎの汽車で寂しく帰ったのを覚えている。わたしの戯曲の第1作は「トンテントン」である。伊万里市の郊外に生まれた山口征矢もそうだったらしく、東京での同窓会の席で意見が一致した。

山口征矢は長く同窓会の幹事をやっていた。律義なのである。頼まれれば嫌とは言えない。山口征矢が幹事をやっている伊万里高校の同窓会には極力参加するようにしていた。演劇は奥方が好きなのかもしれない。わたしの舞台は伊万里や松浦を描いたものが多い。もしかしたら山口征矢はわたしの舞台を通じて、奥方に伊万里や松浦を知ってもらいたいのかもしれない。

伊万里にはカブトガニもいる。生きた化石といわれるカブトガニである。山口征矢は伊万里高校時代、「カブトガニ研究会」に所属していたのではないか。これはまだ本人には確認していない。山口征矢が同窓会の幹事を辞めてからは、わたしも同窓会には出席しなくなった。

しかし、これも面白い話であるが、わたしの後輩の岩橋誠氏が幹事を務めるようになってからは、また、わたしも山口征矢も参加するようになった。岩橋誠氏は伊万里高校の校長をしている時代があって、よくわたしの演劇を伊万里高校で鑑賞してくれた。その恩義がある。夜の飲み会では、下駄を鳴らしてやって来る。2次会のバーやクラブにも下駄である。わたしはこれがうれしかった。「やっぱり、ここは九州の伊万里たい」

「夕暮れの　待ち遠しさや初夏の海」「行く夏や　佐賀の葉隠れ忍ぶ恋」遊園

（松浦市出身）